

チベット仏教カルマ派伝来の観音ジナサーガラについて

高 橋 誠

はじめに

チベットの僧院社会では、高僧の死後に生まれ変わりとされる子供を探し出し、後継者として迎える伝統がある。このような転生僧をチベットでは化身（sprul sku）と呼ぶ⁽¹⁾。化身による地位の相続は十三世紀末にチベット仏教カルマ・カギュー派（以下「カルマ派」）において最初に始められたと考えられている。カルマ派最高位のゲルワ・カルマパ（rGyal ba Karma pa）はチベットにおいて最も古い化身の系譜であり、観音菩薩の化身として崇拝されてきた。カルマ派において化身制度が発展した歴史的経緯は、化身制度に関する研究の中で概説的に扱われる程度に留まっており、十分に明らかにされているとは言い難い。

本稿では、カルマ派に伝わるジナサーガラ（Jinasāgara）⁽²⁾と呼ばれる特殊な形態の観音菩薩について、カルマ派に伝来した過程とゲルワ・カルマパの化身制度の歴史において果たした機能的側面を考察する。ジナサーガラは無上瑜伽タントラに属する観音菩薩としてチベットで広く信仰される本尊であるが、カルマ派ではとくにチャクラサンヴァラや金剛瑜伽女に並ぶ主要な本尊の一つとして位置づけている⁽³⁾。本論の中で明らかにするように、ジナサーガラはゲルワ・カルマパの観音菩薩の化身という性格と深く関わっており、その由来を明らかにすることは化身制度の起源の解明に繋がるものと思われる。

1 カルマ派にジナサーガラが伝来した過程

本章では、一般的なカルマ派の師資相承の系譜との比較を通じて、ジナサーガラが伝来した過程の特殊性を明らかにする。

1-1. 一般的なカルマ派の師資相承の系譜

カルマ派は、インド後期密教の成就者の伝統に由来するナーローパの六法やマハームドラーを奥義とするカギュー諸派の一支派である。そのため、カルマ派の師資相承の系譜はカギュー諸派と共通する祖師から始まる。カギュー派の師資相承は持金剛仏に始まり、ティーローパ、ナーローパなどのインド人成就者からチベット人翻訳官のキュンポやマルパ（1042-1136）に伝えられた。

マルパ（1042-1136）以降、カギュー派は多くの支派に分派する傾向にあったが、とりわけガンポパ（1079-1153）やパクモドゥパ（1110-1170）の弟子の中から多くの支派が生まれた。カルマ派の創始者であるカルマパー世ドゥースムケンパ（1110-1193）はガンポパの弟子の一人である。以下の表は、「金の数珠（gser ‘phreng）」と呼ばれるカルマ派の一般的な師資相承の系譜である。

表 I：カルマ派の師資相承の系譜

(1)	持金剛仏
(2)	ティーローパ
(3)	ナーローパ
(4)	マルパ
(5)	ミラレパ
(6)	ガンポパ
(7)	カルマパー世ドゥースムケンパ
(8)	サンゲレチェン
(9)	ポントクパ
(10)	カルマパ二世カルマ＝パクシ
(11)	ウゲンパ
(12)	カルマパ三世ランチュンドルジェ

持金剛仏（表の(1)）からガンポパ（表の(6)）までの人物はガンポパから派生したカギュー諸派に共通する祖師であり、カルマパー世ドゥースムケンパ（表の(7)）以降がカルマ派の系譜がはじまる。しかしながら、ドゥースムケンパの数代後に総本山ツルプ寺の座主は途絶えている⁽⁴⁾。その後カルマパ二世カルマ＝パクシ（表の(10)）がドゥースムケンパの孫弟子であるポントクパ（表の(9)）からカルマ派の教えを学び、カルマ派の主要な僧院を修復して教団組織を再建した。そのため、サンゲレチェン（表の(8)）とポントクパを経てカルマ＝パクシへと繋がる流れが、現在まで続くカルマ派の師資相承の本流となっている。

1-2. ジナサーガラ師資相承の系譜

それでは次にカルマ派伝来のジナサーガラ師資相承の系譜について見ていくこととする。以下の表は、カルマチャクメー（1613-1678）の著作（KC）及びシトゥ九世ペマニンチュワンポ（1774-1853）の著作（S9）に基づいて、カルマ派伝来のジナサーガラ師資相承の系譜をまとめたものである。

表Ⅱ：カルマ派伝来のジナサーガラの師資相承

A	B (bkha' ma)	C (gter ma)
阿弥陀仏		
観音菩薩		
①パドマヴァジュラ	I パドマサンバヴァ	
②ジャーランダラバ	II バンガラのパクモ	i ティソンデツェン
③マイトリーパ	III マチグ	ii ニヤンレル・ニマウーセル
④バジュラパーニー	IV ティプパ	iii ミキュードルジェ
⑤スマティキールティ		iv ダムパ・デシェク
⑥レチュンパ		
⑦サンリレパ		
⑧サンゲレチェン		
⑨ポンタクパ		
カルマパ二世カルマ＝パクシ		

カルマ派伝来のジナサーガラは阿弥陀仏と観音菩薩に始まり、A、B、Cの三つの流れに分かれてカルマ＝パクシへと伝わる。まずAの流れに含まれるパドマヴァジュラ（表Ⅱの①）、ジャーランダラパ（表Ⅱの②）の二人はインド後期密教の八十四成就者⁽⁵⁾に登場するインド人成就者である。そして、マイトリーパ（表Ⅱの③）とスマティキールティ（表Ⅱの⑤）の二人はマルパがインドやネパールにおいて師事した人物である。以上のことから、Aの流れはカギュー派の祖師らによって後伝期にインドからチベットに伝えられたと考えられる。

次にBとCの流れはパドマサンバヴァ（表ⅡのI）から派生していることからニンマ派に由来することが分かる。ニンマ派の伝統ではパドマサンバヴァの秘訣はカマ（bka' ma）と呼ばれる口頭の伝承とテルマ（gter ma）と呼ばれる埋蔵經典の二つの方法で後世に伝えられるが、BとCはそれぞれカマとテルマの系統として説明されており、ニンマ派の分類法が適用されている。

AとBの流れはレチュンパ（表Ⅱの⑥）で合流する。レチュンパはカギュー派の祖師の一人ミラレパ（表Ⅰの⑤）の主な弟子の一人であり、マルパ（表Ⅰの④）が得られなかった教えを求めて三度ネパールへ赴き、ナーローパ（表Ⅰの(3)）の弟子のティプバ（表ⅡのIV）やマチグ（表ⅡのIII）などの人物に学んだことが知られている。また、スマティキールティ（表Ⅱの⑤）とティプバ（表ⅡのIV）はネパール人であることから、レチュンパはネパールにおいてAとBのそれぞれのジナサーガラの口訣を授かり、それらを合わせて弟子に伝えたと考えられる。レチュンパの後にはサンリレパ（表Ⅱの⑦）、カルマパー一世ドゥースムケンパ（表Ⅰの(7)）の弟子であるサンゲレチェン（表Ⅰの(8)及び表Ⅱの⑧）、ポンタクパ（表Ⅰの(9)及び表Ⅱの(9)）を経てカルマパ二世カルマ＝パクシへと伝えられた。

最後に埋蔵經典であるCの流れはニャンレル・ニマウーセル（1124-1192）（表Ⅱの⑬）とミキュードルジェ⁽⁶⁾（表Ⅱの⑭）、カトク寺の創始者であるダムパ・デシェク（1122-1192）（表Ⅱの⑮）を経てカルマパ二世カルマ＝パクシに伝えられた。ダムパ・デシェクとカルマ＝パクシは年代的に重ならないが、ここではカトク寺に伝わっていたジナサーガラテキストをカルマ＝パクシが受け取ったものと解釈する。

それでは以上のことを踏まえて、カルマ派に伝わるジナサーガラの特徴について考えてみたい。まず、ジナサーガラの師資相承の中にカルマパー世ドゥースムケンパが含まれていない点に着目したい。一般的なカルマ派の師資相承の系譜と比較すると、ジナサーガラの師資相承の系譜に最初に登場するのはサンゲレチェン（表Ⅰの(8)、表Ⅱの⑧）である。先に述べたように、サンゲレチェンとポンタクパ（表Ⅰの(9)、表Ⅱの⑨）はカルマ＝パクシがカルマ派を再興したことで本流となる系譜に位置づけられるようになったと考えられ、実際にはカルマ＝パクシの時代にカルマ派に齎されたと考えるべきである。

また、Cの流れに含まれるニャンレル・ニマウーセル（表Ⅱのii）とミキュードルジェ（表Ⅱのiii）の二人はニンマ派の埋蔵經典『マニカンブム（*Ma ni bkha' 'bum*）』を編纂した師弟として知られる。『マニカンブム』とは観音信仰に彩られたチベットの開闢神話や古代王朝の伝説を語った古典の一つであり、カプステイン（1992）によると、『マニカンブム』はとくに観音信仰と観音菩薩の六字真言「オンマニペメフン（om mani padme hum）」⁽⁷⁾を宣揚しているという⁽⁸⁾。

ところでカルマ＝パクシは観音菩薩の六字真言を歌にして民衆に広めたことで知られている。カプステイン（1992）は『マニカンブム』とカルマ＝パクシの同時代性について指摘しているが、具体的な関係性までは明らかにしていない。以下ではカルマ＝パクシの六字真言の布教とジナサーガラの関係について見て行くこととする。

2 カルマ＝パクシによる六字真言の布教とジナサーガラの関係

2-1. カルマ＝パクシの生涯

カルマ＝パクシはカム地方のディチュ河沿いの地域に生まれた。カルマ＝パクシの出自は中央チベットからカム地方へ移り住んだ貴族の末裔と考えられているが、氏族名までは伝えられておらず、サキヤ派のクン氏やパクモドゥ派のラン氏のような古代チベットから続く有力氏族であったとは考えにくい（Manson, 2009）。

カルマ＝パクシは十一歳もしくは十六歳の時に、中央チベットへ向かう道中でドゥースムケンパの孫弟子であるポンタクパと出会い、両者はカム地方にあるニンマ派の名刹として知られるカトク寺を訪れた。カルマ＝パクシは沙弥戒と具足戒をカトク寺のチャンパブム（1179-1252）の元で与えられており、出家して具足戒を授かるまでにかかる比較的長い期間をカトク寺で過ごしたと考えられる⁽⁹⁾。前章で扱ったジナサーガラの埋蔵經典テキスト（表ⅡのCの流れ）は、カ

ルマ＝パクシがカトク寺で学習した期間に授かったと考えられる。

具足戒を授かった後に、カルマ＝パクシは瞑想修行のためにプンリ山やカンボネナンなどの地へ赴いた。とくにプンリ山では六字真言を歌にして民衆に広めることを促すダーキニーのヴィジョンを得たという。また、ドゥースムケンパが瞑想修行を行ったカンボネナンの地ではカギュー諸派で重視される金剛瑜伽女の瞑想を行った。

瞑想修行の後に、カルマ＝パクシはカルマ派の主要な寺院を順に修復していった。同時にカルマ＝パクシは中央チベットのウ・ツァン地方での布教活動を精力的に行っており、寺院の修復や教団組織の再建に不可欠な財力や人足を集めたと推測される。この際に、六字真言を歌にして民衆に広めるという方法は市井から布施を集める上で大きな役割を果たしたと考えられる。

ところでカルマ＝パクシがカルマ派の主要な寺院を修復し、チベット各地で教線を拡大した時期は、モンゴルとチベットが初めて接触した時期と重なる⁽¹⁰⁾。カルマ＝パクシは1254年にフビライ（1215-1294）によって招聘され、翌1256年には当時のモンゴル帝国のハーンであったモンケ（1209-1259）と会見した。『サキャ派の系譜』（SD）のパクパ伝には、カルマ＝パクシは当時のモンゴル宮廷におけるパクパの最大のライバルとして描かれている。しかしながら、モンケの死後、カルマ＝パクシはアリクブゲ側を支持したことによってフビライから迫害を受け、チベットへ戻ることとなった。カルマ＝パクシはチベットに帰還した後、ツルプ寺に弥勒像や観音堂を建立し、1283年に没した。

2-2. 六字真言の布教とジナサーガラの関係

無名であったカルマ＝パクシが短期間のうちにカルマ派の再興を成し遂げ、モンゴル宮廷においてパクパと肩を並べるほどに台頭したのは、六字真言を用いた独自の布教戦略によるところが大きいと思われる。年代記『ケーパー・ガートン』（KG）のカルマ＝パクシ伝には、六字真言の布教について次のように記されている。

この大成就者（カルマ＝パクシ）はジナサーガラの灌頂の悟りの行為によって成就し、五人のダーキニーが「マニ（六字真言）をこのように〔唱えて〕、すべての民衆を導きなさい。見たり聞いたりしたすべての者を私が祝福しよう。」とお話になる〔ヴィジョン〕をご覧になると、法縁の目的と一致して促しなされた。（KG, p. 454）

カルマ＝パクシはジナサーガラの実践を通して六字真言の布教を促す五人のダーキニーのヴィジョンを得たという。この五人のダーキニーのヴィジョンとはプンリ山においてカルマ＝パクシが得た次のようなヴィジョンを指している。

四種姓のダーキニー⁽¹¹⁾が「この法によって教化する時が来た。」と促したので、主に六字真言によって所化を教化した。秘密智慧ダーキニーの群れが取り囲み、「マニ（六字真言）を歌にしてこのように唱えなさい。見たり聞いたりした者すべてに祝福が生じるであろう。」（KG, p. 449）

このヴィジョンには五種のダーキニーが登場するが、とりわけ秘密智慧ダーキニーには、カルマパクシに対して六字真言を歌にして広める方法を教える重要な役割が充てられている。カルマパ三世ランチュンドルジェの著作集（K3S）に収録される『ジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）の灌頂儀礼』⁽¹²⁾に基づくと、灌頂儀礼の中心部分である瓶灌頂、秘密灌頂、般若智慧灌頂、第四灌頂のうち、秘密灌頂と般若智慧灌頂において秘密智慧ダーキニーの観想を行う。また、ジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）の灌頂儀礼や成就法では繰り返し六字真言が唱えられる。つまり、五人のダーキニーのヴィジョンにはジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）の灌頂儀礼の特徴が反映されていることが分かる。以上のことから、六字真言の布教がジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）に関係付けられていることは、五人のダーキニーのヴィジョンからも確かめられる。

また、シャマル二世カチューワンポ（1350-1405）の著作集（S2S）や年代記『ケーパー・ガートン』（KG）に収録されるカルマ＝パクシの伝記に基づくと、カルマパクシは晩年にツルプ寺において五尊ジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）のヴィジョンを見て、観音堂を建立したという。

また、〔ツルプ寺の〕霊塔のある場所のすべてを五尊ジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）が満たしているのをご覧になられて、観音堂を建立した。十字真言⁽¹³⁾と四方の僧伽に火の方法を立てて、「観音菩薩と苦しみを有する有情らは同一であり、私（カルマ＝パクシ）の本尊（yi dam）である。」とお話になった。（KG, pp.）

ところで下線部ではジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）がカルマ＝パクシの「本尊（yi dam）」であることが述べられている。チベットには特定の神仏を守り本尊として祀る慣習があるが、カルマ＝パクシはとくにジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）を守り本尊として信仰していたと考えられる。以上のことから、カルマ＝パクシは六字真言の布教をとくにジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）に関係付けていたことが明らかになった。

3 化身制度の始まりとジナサーガラの実践

制度としてのゲルワ・カルマパの化身相続は、カルマパ二世カルマ＝パクシの死後に、転生者としてカルマパ三世ランチュンドルジェ（1284-1339）が探し出されたことに始まる。化身相続の導入以降、六字真言の布教とともにジナサーガラ（rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga）の灌頂儀礼を行うことがゲルワ・カルマパの行動様式として定着していった。本章ではカルマパ三世ランチュンドルジェとカルマパ五世デシ

ンシェクパ（1384-1415）の事例を取り上げて、ジナサーガラの灌頂儀礼が持つ側面を考察する。

ランチュンドルジェは1333年に元朝宮廷を訪れ、順帝トゴンテムル（1320-1370）と会見し、「灌頂国師」の称号を与えられた⁽¹⁴⁾。その後ランチュンドルジェは一度チベットへ戻り、後に再び元朝宮廷を訪れて1339年に客死した。『補陀洛迦山伝』⁽¹⁵⁾にはランチュンドルジェの事績について次のように記録されている。

今上皇帝（トゴンテムル）が即位した初年に、聖師大宝カルマパが西域（チベット）より京師に来ていた。…（省略）… 観自在菩薩の慈悲心とともに六字真言の神力を宣揚した。上は宮廷、王臣から下は庶民に至るまで、等しく教え導き、法の教えを施した。奇跡はとても多くて記録することはできない。まさに観音菩薩の応化者である。しかしながら、江南の地では未だ知られておらず、そのためにその事実を簡略に記した。師が常に念誦する「オンマニペメフン」の功德は『大乘莊嚴宝王經』に記されている。

以上の記述から、ランチュンドルジェは元朝を訪問した際に、宮廷から庶民に至るまで広く六字真言の念誦を布教していたことが分かる。また、ランチュンドルジェは元朝から「灌頂国師」の称号を与えられていることから、元朝宮廷において何らかの灌頂儀礼を行っていたと考えられる。ランチュンドルジェの著作集（K3S）に収録される『ジナサーガラの灌頂儀礼（*rGyal ba rgya mtsho'i dbang cho ga*）』⁽¹⁶⁾のテキストのコロフォンには、犬の年（1334）の五月にランチュンドルジェらが大都からチベットへ戻る際に弟子たちに求められて執筆したことが記録されている。また、北京の国家図書館にはランチュンドルジェが記したジナサーガラの成就法に関する漢訳のテキスト『大悲勝海求修方便』⁽¹⁷⁾が所蔵されている。これらの史料はランチュンドルジェが元朝においてジナサーガラの灌頂儀礼を行っていたことを示している。さらにランチュンドルジェの晩年の自伝によると、ランチュンドルジェは大都の宮殿の中央にジナサーガラを本尊とする仏殿を建立していた。

大宮殿大都の中央に、国王の勅によって曼荼羅の無量宮のように〔仏殿〕を造りなさって、皇帝と王子の長寿と、仏の教えが永く続くように、正殿をジナサーガラの諸尊、左右の仏殿にはカギュー派のラマと五尊チャクラサンヴァラの曼荼羅を建立した。他にも釈尊の百の前世譚や十二の事績などを後ろに描いた。護法尊ベルナクチェン⁽¹⁸⁾と女尊や眷属、四天王や護法女神などを建立し、よく完成させて開眼供養を行った。（K3S, vol.4, pp.411-412）

ランチュンドルジェが大都に建立した仏殿には、カギュー派に関係するラマや諸尊の仏殿が両脇に設けられていることに対して、ジナサーガラには正殿が充てられている。また、「曼荼羅の

無量宮のように」という記述からは、この仏殿がジナサーガラを中心とした曼荼羅に模したものであったことが推測される。以上のことから、ランチュンドルジェは元朝宮廷において六字真言の布教とともにジナサーガラの灌頂儀礼を行っていたと考えられる。

カルマパ五世デシンシェクパは明朝の永楽帝に迎請されて南京を訪れた人物としてチベット史において名高い人物の一人である。デシンシェクパは永楽四（1406）年の冬から永楽六（1408）年の春まで明朝に滞在し、この間に永楽五（1407）年二月に南京の靈谷寺において挙行された普度大斎や永楽五年七月に亡くなった永楽帝の皇后の法要を命じられた。とくにデシンシェクパが儀礼を執り行った永楽五年靈谷寺普度大斎では、法要の行われた二月から永楽五年四月の万寿聖節までの間に靈谷寺において五色の彩光や塔影などの奇跡が現れ、それらは絵巻や『靈谷寺塔影記』として記録された。

シャマル四世チュウタクイエシェ（1453-1524）の著作集（Z4S）に収録されるデシンシェクパ伝と年代記『ケーパー・ガートン』（KG）のデシンシェクパの伝記に基づくと、デシンシェクパはジナサーガラの曼荼羅を作製し、儀礼の中で永楽帝の父母の名前が記された木牌を使用したという。これらの点から、普度大斎で行われた儀礼はカルマ派に伝わるジナサーガラを本尊とした「観音菩薩の法門を通じて死者の障碍を浄めるもの（*sPyan ras gzigs kyi sgo nas sgrib pa sbyong ba*）」であったと比定することができる。以下の表はランチュンドルジェの著作集（K3S）に収録される本儀礼のテキスト⁽¹⁹⁾に基づいて、本儀礼の式次第を順に並べたものである。

「観音の法門を通じて障碍を浄めるもの」の式次第

1	前行
1-1	七支供養 ⁽²⁰⁾
1-2	自らを本尊の姿に生起する
1-3	水瓶の生起
2	〔死者の利益をなす〕本行
2-1	加行
2-2	死者を利益するための本行
2-2-1	死者の魂の召喚
2-2-2	魔を祓う
2-2-3	死者の罪の浄化
2-2-4	沐浴〔六煩惱をその対治となる六波羅蜜で洗う〕
2-2-5	毒の浄化〔三宝が三毒を滅する〕・〔五大〕・吉祥偈
2-2-6	観音の曼荼羅に入って、灌頂を通じて罪を浄める
2-2-6-1	懺悔・随喜・転法輪・ラマの長寿祈願・回向・帰依（七支供養）

2-2-6-2	発心
2-2-6-3	五智灌頂・本尊へ灌頂を授けて下さいと祈願・五仏から灌頂を授かる
3	後行
3-1	名札を燃やす
3-2	道を示す
3-3	回向

本儀礼の式次第に照らすと、永楽帝の父母の名牌を使用して、魂を召喚し、永楽帝が亡き父母の代理として灌頂を受けたと考えられる。儀礼の内容は明朝側からは永楽帝の父母の供養という目的に合致したものであり、一方でカルマ派の側からはジナサーガラの灌頂儀礼としての側面を持っていた。また、『御製靈谷寺塔影記』⁽²¹⁾には、デシンシェクパの側近の一人であるリンチェンペル（灌頂通悟弘濟大国師高日瓦領禪伯）が塔影の中に赤い観音菩薩像を目撃したことが記されている。

〔永楽五年四月〕十九日の朝、灌頂通悟弘濟大国師（リンチェンペル）がやって来て報告した。塔影の第一層には大宝法王西天大善自在仏の像が三つ、羅漢の像が六つあり、〔それぞれの〕左右を囲んで立っていた。第二層には赤い色の観音菩薩像が一つあり、左右には四つの菩薩像が侍立し、合掌して香や花を手を持って供養していた。

下線部の赤い色の観音菩薩はジナサーガラを指し、周囲の四人の菩薩を合わせて五尊ジナサーガラの曼荼羅を表しているものと解釈できる。このように漢文史料からも永楽五年普度大斎においてジナサーガラの儀礼が行われたことを確認することができる。ところで灌頂儀礼では曼荼羅を使用して本尊の形態を観想する作業を伴う。とくに靈谷寺普度大斎で行われた死者の罪障を浄める儀礼では、視覚的にゲルワ・カルマバを体の赤い四臂観音として観想する。リンチェンペルが目撃したという塔影のヴィジョンにはデシンシェクパとジナサーガラが重ねられており、両者が本質的に同一のものであると認識されていたことが分かる。つまり、ジナサーガラの灌頂儀礼にはゲルワ・カルマバを観音菩薩の化身として視覚的に演出する側面があるといえる。ゲルワ・カルマバの転生者は、六字真言の布教やジナサーガラの灌頂儀礼などの具体的な行動をととして観音菩薩の化身としての権威を高めていったのではないかと考えられる。

おわりに

本稿ではカルマ派に伝わるジナサーガラについて、カルマ派に伝来した過程とゲルワ・カルマパの歴史において果たした役割を考察した。本稿で明らかになったことは次のとおりである。ま

ず、ジナサーガラはカルマ派の創始者であるカルマパー世ドゥースムケンバから伝えられたものではなく、カルマパ二世カルマパクシによって集成され、カルマ派に齎されたものであったことが明らかになった。また、カルマ＝パクシがカトク寺で得たジナサーガラは埋蔵經典テキストは、ニンマ派の埋蔵經典『マニカンプム』と関係があることが明らかになった。そして、二章ではカルマ＝パクシがジナサーガラを守り本尊として信仰し、六字真言の布教に関連付けていたことを明らかにした。三章では化身制度がはじまった後に、ゲルワ・カルマパの転生者が六字真言の布教とともにジナサーガラは灌頂儀礼を各地で行っていたことを明らかにした。ジナサーガラはゲルワ・カルマパの「お家芸」的灌頂儀礼として定着し、ゲルワ・カルマパを観音菩薩の化身として演出する作用を果たしたと考えられる。

チベット語史料（略号表）

DG *Deb ther sngon po*. gZhon nu dpal. 成都：四川民族出版社、1985。

DM *Deb ther dmar po rnams kyi dang po hu lan deb ther*. Kun dga' rdo rje. 北京：民族出版社、1981。

KC *bcom ldan 'das dpal thugs rje chen po rgyal ba rgya mtsho'i bdag bskyed kyi dka' ba'i gnad rnams bkrol ba'i don 'grel nyi ma'i 'od zer*. Karma chags med. (*Karma KaM tshang gi rang lugs cho ga'i skor*. kLu sgrub rgya msho, 2005, 481-1016)

KG *Chos byung mkhas pa'i dga' ston*. gTsug lag 'phreng ba. 北京：民族出版社、2006。

K3S *Karma pa rang byung rdo rje'i gsung 'bum*. Rang chung rdo rje. Zi ling. mTsur phu mkhan po Lo yag bkra shis, 2006.

SD *Sa skya'i gdung rabs ngo mtshar bang mdzod*. Ngag dbang kun dga' bsod nams. 北京：民族出版社、1986。

S9 *Phags mchog spyan ras zgigs rgyal ba rgya mtsho'i dbang bskur ye shes myur 'bebs*. Padma nyin byed dbang po. (*Karma KaM tshang gi rang lugs cho ga'i skor*. kLu sgrub rgya msho, 2005, 173-237)

Z2S *The collected writings (gsun 'bum) of the second zwa-dmar mkha'-sphyod-dban-po*. mKha' spyod dbang po. Gangtok: Gompo Tseten, 1978.

Z4S *Thams cad mkhyen pa zhwa dmar bzhi pa spyan snga chos kyi grags pa'i gsung 'bum*. Chos grags ye shes. 北京：中国藏学出版社、2009。

漢文史料

『元史』中華書局、1976。

『明實錄：附校勘記附錄』中央研究院歷史語言研究所、1966-1968。

葛寅亮撰『金陵梵刹志』廣文書局、台北、1976。

劉辰『国朝典故』新興書局有限公司、台北、1985。

日本語文献

田中公明2000『活仏たちのチベット』春秋社

同2007『曼荼羅グラフィクス』山川出版社

山口瑞鳳1977「活仏について」『玉城康四郎博士還暦記念論集：佛の研究』春秋社

杉木恒彦訳2000『八十四人の密教行者』春秋社

欧文献

- Bdud 'joms 'jigs bral ye shes rdo rje. 1991: *The Nyingma School of Tibetan Buddhism : its fundamentals and history*, Boston.
- Douglas, Nik & Meryl White. 1976: *Karmapa the Black Hat Lama of Tibet*, London.
- Karma Thinley. 1980: *The History of the Sixteen Karmapas of Tibet*, Boulder.
- Lama Kunsang, Lama Pemo and Audele, Marie. 2012: *History of The Karmapas*, Ithaca.
- Manson, Charles E. 2009: "Introduction to the Life of Karma Pakshi (1204/6-1283)," *Bulletin of Tibetology* 45, 25-49.
- Matthew Kapstein. 1992: "Remarks on the mani bka 'bum and the Cult of Avalokitesvara in Tibet," *Tibetan Buddhism, Reason and Revelation*. New York, 87-88.
- Richardson, H.E. 1958: "The Karmapa Sect: An Historical Note. Part I ," *Journal of the Royal Asiatic Society*, 139-164.
- . 1959: "Part II ," *JRAS*, 1-17.
- . 1982: "Memories of Tsulpu," *Bulletin of Tibetology* 1, 31-34.

中国語文献

陳慶英2009『活仏伝世及其歴史定製』中国藏学出版社

注

- (1) チベット語でトゥルク (sprul sku) とは「化身」を意味し、サンスクリットの「avatara」に相当する語である。従って、トゥルクは単なる高僧の生まれ変わりではなく、衆生を導く神仏の化身であると考えられている。
- (2) チベット語ではゲルワギャツォ (rGyal ba rgya mtsho) と表記され、「勝者の海」を意味する。
- (3) カギュー諸派に伝わる主な法統は、秘密集会、チャクラサンヴァラ、ヘーヴァジュラ、マハーマーヤーなどの諸タントラ及びナーローバの六法やマハームドラーなどが挙げられる。諸タントラの中ではとくにチャクラサンヴァラの実践が重視されている。カギュー諸派では金剛瑜伽女をチャクラサンヴァラの妃として重視する。カルマ派では密教の生起次第の実践においてチャクラサンヴァラ、金剛瑜伽女、ジナサーガラの三尊を主要な本尊として位置づけている。
- (4) DM や DG に基づくと、カルマ派の総本山ツルプ寺の座主の継承は、カルマパー一世ドゥースムケンバから五代目のリンチェンタクで途絶えたとされている。また、カルマバ二世カルマ＝パクシの伝記の諸本には、カルマ＝パクシがカルマ派の総本山であるツルプ寺をはじめて訪れた時には既に頽廃していたことが伝えられている。
- (5) インド後期密教が発展した九世紀から十二世紀に在野で活躍したインド人成就者を指す。*Caturasitisiddhapravrtti* (チベット語訳は *Grub thob brgyad cu tsa bzhi'i lo rgyus* [北京版 No.5091]、和訳は杉木恒彦 2000『八十四人の密教行者』) には、カギュー派の祖師であるティーローバ、ナーローバやサキャ派の祖師であるヴィルーパーなどの八十四人の成就者の伝記が収録されている。
- (6) 十二世紀の人物。生没年の詳細は不明であるが、ニャンレル・ニマウセルの弟子として知られている。
- (7) 『仏説大乘莊嚴王經』(大正蔵 No.1050) を出典とする陀羅尼であり、チベットでは日常的によく唱えられる。
- (8) 『マニカンプム』には、六字真言の出典である『大乘莊嚴王經』が収録される他、六字真言に関連する成就法が多く収録されている。また、チベットの開国神話を含むソンツェンガンポ王の伝記 には各章の冒頭に六字真言が置かれ、十一章では六字真言の優れた性質について『大乘莊嚴王經』に依拠して説かれている。
- (9) カルマ＝パクシがツルプ寺などのカルマ派の寺院ではなく、カトク寺において教育を受けたことについて、

マンソン（2009）は当時のカルマ派の寺院がすでに頽廃していたことを原因として挙げているが、シャマル二世カチューワンポの著作集（Z2S）に収録されるボンタクパの伝記に基づくと、ボンタクパはチャンパブム名声を聞きつけてカトク寺を訪れており、むしろカトク寺に伝わる教えを学ぶことが第一の目的であったと思われる。

- (10) 1239年にモンゴル軍がチベットへ侵入した後、1247年に西涼州においてコデンとサキヤ派のサキヤ・パンディタ（1282-1251）が会見し、1253年にはフビライとサキヤ・パンディタの甥のパクパ（1235-1280）が陝西の六盤山で会見した。他にツェル派やディグン派もモンゴル宮廷と
- (11) 『アビサマヤ・ムクターマラー』に収録される「ジナサーガラの現観」では、中央にジナサーガラと秘密智慧ダーキニーのヤブユム、東南西北八方の花弁にそれぞれヴァジュラダーキニー、ラトナダーキニー、パドマダーキニー、カルマダーキニーが配置されている。『アビサマヤ・ムクターマラー』に収録されるジナサーガラについては、田中公明先生にご教示を頂いた。
- (12) K3S, 9, 326-350.
- (13) Z2S に収録されるカルマ=パクシの伝記では、十字真言ではなく六字真言と記されている。
- (14) 『元史』第三十九卷、本紀第三十九順帝二、至元三年の記事には「徵西域僧加刺麻至京師、號灌頂國師、賜玉印。」とある。
- (15) 元盛熙明『補陀洛迦山伝』（『大正蔵』No.2101）
- (16) K3S, vol.9, pp.326-350.
- (17) 北京国家図書館所蔵『修習法門口卷』（明抄本、書号：6555）。「勝海」とはジナサーガラ（勝者の海）を直訳したものである。
- (18) ベルナクチェン（Ber nag can）とは、カルマ派の主な護法尊であり、特殊な形態のマハーカーラである。
- (19) *sPyan ras gzigs kyi sgo nas sgrib pa sbyong ba bzhugs* (K3S, vol.9, pp.359-373)
- (20) 七支供養とは礼拝、供養、懺悔、隨喜、轉法輪、長寿祈願、回向を指す。
- (21) 『金陵梵刹志』 pp.98-99